

一月二十九日、インド経由ロ
ーマ行きのアリタリア航空機に
私たちが乗りこんだ。

今度の旅は、アジアでは最大
規模と言われる国際ジャズフェ
スティバル、ジャズヤトラの
に参加するためのもので、十三
時間の長い飛行も、気分が昂揚
があつて苦にならなかつた。

ドロンというショックの機は
デリーに降り、そのままのす
ぐらい乱暴な操縦で走り廻って止
まったが、空港は裸が電球がほ
つんとつと照らす暗闇の飾り気
も無い建物で、こつこつ背の高
テーブルと椅子、何とも言えな
い匂い、かつた大気は何と
なく映画カサブランカに似てい
る。

税関の検査は意外に簡単に、
オーケーのサインが出たが、そ
れは何と、出迎える関係者が、
袖の下を手渡したためその現
場を見てしまったのである。

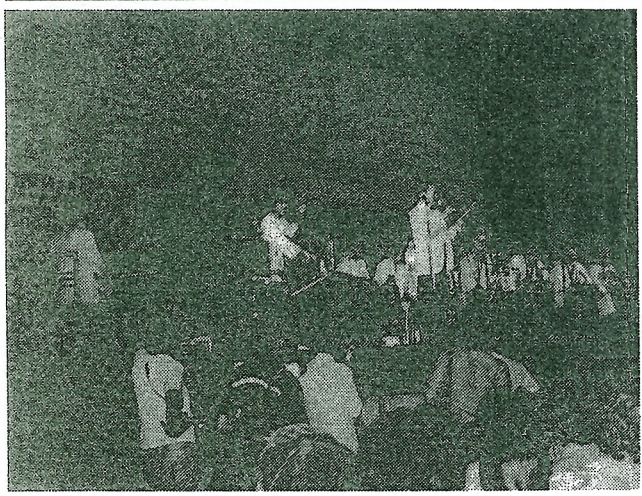
つすよつた白や青のターバ
ンを着いた老人、濁った眼の男
裸足のポーター、手を出して物
乞ひする子供たちなど、こつた
がえず空港をめぐり、専用バス
で宿舎に向かう。

早晩四時とまだうす暗へ、
すれ違ふ車も、人影も見られな
い町並みを二時間走り、最
高級と云つた ASHOK ホテ
ルに入る。デリーは標高が高

階級差の甚しさに驚く

インド演奏旅行記 上

山木幸三郎 (ニューハート)



ジャズヤトラ・オンステージ (ボンベイ)

い。何より恐ろしいのは音がな
にもないことだ。シタールのひ
びきは空の上の階級差の
ものよな。

ふと横丁を曲ると何処もアラ
ム街で、商売女が群がっている。
オカマもいる。タンポールの家
毛布一枚で路端に寝ている者も
少なからず。咽声も一つも聞
かない。何か打つ音もない。

バラックから子供が出て来
て、道にワンコをすまるとカラス
が降りて来て、それをつつく。ノ
ラ犬がたかる。カメラを取り出
すと大勢の子供が群がって来て
石を投げ出した。あわてて逃げ
出すと角の煙草屋が「カメラを
見せなう方がよい」と注意して
くれた。

表通りに戻って、日本のソバ
屋に入った。感じのレストランに
入り、隣で食べている物と同じ
ものを注文した。

「タンドリ」とかいうもの
でマントンの切れはしにカレーの
汁がかかっている。口に入れて
みるとその辛さで頭が後ろの
壁にぶつかって倒れそう。慌て
てビールを頼む。

肉が臭くそれを消すためのも
のすし香辛料の匂いで鼻が曲って
しまう。店の客が寄って来て覗
きこむ。もう一口、また後頭部
がガンと打ち壊してビールと
水を飲む。うす笑いを浮かべた
人たちが集まる。やけくそでも
う一口、涙が出て来て金を払っ
て表に飛び出す。後ろに笑い声
が起った。タクシーをつかま
えてホテルに戻る。一行の誰彼
もやられたように、ハット君は
子供に靴を汚されて、別の子供
にみがかせうと追われ、ドラム
君はコブラの写真をとられて
百ルピー取られ、サックス君は
女乞食に金をやちって浮浪児にツ
バをかけた。と云つた有様。

その夜は親善演奏会でホテル
の庭は椅子を並べテントを張っ
て、今見て来た街は全くの別
天地。上流階級と下層階級の差
にはたまたま驚かすばかりであつた。
サリーを着たインド女性はその
夜のコンサートで初めて見た。

このデリーのコンサートでは
音響器材が無くて、かえってハ
タなミキサーにまかされてい
ることもなく、よもやあることだ
と皆が強弱、バランス、リズム感
などを全くと、神経をつかい、心
の通った演奏となり、聴衆もま
た終始乗っこんで、楽しんでい
る。夜にすむことが出来た。

この後、全貴高級インド料理
店に招待された。この店の客の
殆んどは白人で、料理の味も、
それ程辛くない。

私は飲食に關しての適性が
強いで大抵のものにはこぼせる
自信があり、一層のカレー料理に
は降参したが、それも辛党であ
るから、酒を飲むのつものがある
わね、おなごのつもの、そこで酒
を注文する。「ナン」と云う。

今日は無いというのだ。

時計は十二時を少しまわつて
三十一日になつて来たが、その
日はインドでは酒が飲めない日
なのだ。オエライマンの
命日かな。見まわすと密に
なジュースのグラスをおいてい
る。女子供はあまのこ、何
も悪いことではないのに、ナン
と第一夜がこれである。

それはさうおきこの酒投きの
レストランで、さうインドの音
楽に接することが出来た。

十層のこの絨毯を敷いたス
テージは女性の歌い手を中心
に、シタールのような楽器が二
人、それに笛とバイオリン、
恰にモンペ風衣裳の唄い手は
あやをかりて、もの哀しい旋
律をうたいメロ楽器がそれを追
いかける。聞けば印度北方の民謡
そのことであつた。

私たちが見つけて一座がサッ
ラクラを舞ははじめる。何だ
かゆきれななななななななな
くさくさ宿舎に引きあげた。

部屋の窓に見る夜空は素晴ら
しく、星も月も日本で見ると
は違ふ輝きを放つていた。

街中に音無く、食事に酒無く
せめて湯豆腐で一杯やる夢も
みよかかとベッドにもぐつたが
薬(サウ)を飲損つてあから
なかなか寝つかず、ちつと少
しうとうとしたのも束の間、モ
ーニングコールのベルが鳴って
ボンベイに向か出発。眠い。
一月三十一日午前十一時にボ
ンベイ空港に降り立つ。

飛行機の客は殆んどがイン
ド人、機内に流れるBGMは数曲
のインド民謡でそれだけの際限
の無い繰返しにはいささかうん
ざりさせられた。

ボンベイは、アラビア海に面
したインド西海岸の港町で、何
となくデリーより陽気な感じを
与える。

荷物や楽器と共にキウウキ
ウ、バスに詰め込まれ、その間ボ
ーター達がチップの額で喧嘩し
たり、彼等は仲間分けするこ
となしなない。一行の誰彼も
百円ライターをせびつたり、ち
つと走り出さず、巡査
がバスの前に立ち塞がって「此
処は駐車禁止である」と因縁を
つける。無論ドライバーが目撃し
た。関係者の話では「この
コネられる厄介な金を与えた
方が万事うまく行くぞうで」「お
まわりもなかなかなが悪い
か。そこへ行くのが日本の
警官は優秀だと思われないわけ
に行かない。融通のきかない嫌
々はあるにせよ」

市内に入ると、マリンドライ
ブという道と砂浜が延々と続き
ビル街が急にバラックの貧しい
家並みにとって変わった。さ
う、人だかりがしてゐるのは大
映画館で、映画は市民の一番の
娯楽のよつた。

ちなみにボルノは後進国の
多分にもれず禁止である。

さて一行は宿舎のプレジデ
ントホテルに荷を解き、午後三時
から早速、ジャズヤトラの会場
プレジデントスタジアムで、ミキ
シングのチェックが行われた。

素面で聴いた印度の哀歌

インド演奏旅行記 中

山木幸三郎 (ニューハート)



ジャズヤトラの控室ならぬ控テントにて

このデリーのコンサートでは
音響器材が無くて、かえってハ
タなミキサーにまかされてい
ることもなく、よもやあることだ
と皆が強弱、バランス、リズム感
などを全くと、神経をつかい、心
の通った演奏となり、聴衆もま
た終始乗っこんで、楽しんでい
る。夜にすむことが出来た。

この後、全貴高級インド料理
店に招待された。この店の客の
殆んどは白人で、料理の味も、
それ程辛くない。

私は飲食に關しての適性が
強いで大抵のものにはこぼせる
自信があり、一層のカレー料理に
は降参したが、それも辛党であ
るから、酒を飲むのつものがある
わね、おなごのつもの、そこで酒
を注文する。「ナン」と云う。

今日は無いというのだ。

時計は十二時を少しまわつて
三十一日になつて来たが、その
日はインドでは酒が飲めない日
なのだ。オエライマンの
命日かな。見まわすと密に
なジュースのグラスをおいてい
る。女子供はあまのこ、何
も悪いことではないのに、ナン
と第一夜がこれである。

それはさうおきこの酒投きの
レストランで、さうインドの音
楽に接することが出来た。

十層のこの絨毯を敷いたス
テージは女性の歌い手を中心
に、シタールのような楽器が二
人、それに笛とバイオリン、
恰にモンペ風衣裳の唄い手は
あやをかりて、もの哀しい旋
律をうたいメロ楽器がそれを追
いかける。聞けば印度北方の民謡
そのことであつた。

私たちが見つけて一座がサッ
ラクラを舞ははじめる。何だ
かゆきれななななななななな
くさくさ宿舎に引きあげた。

部屋の窓に見る夜空は素晴ら
しく、星も月も日本で見ると
は違ふ輝きを放つていた。

街中に音無く、食事に酒無く
せめて湯豆腐で一杯やる夢も
みよかかとベッドにもぐつたが
薬(サウ)を飲損つてあから
なかなか寝つかず、ちつと少
しうとうとしたのも束の間、モ
ーニングコールのベルが鳴って
ボンベイに向か出発。眠い。
一月三十一日午前十一時にボ
ンベイ空港に降り立つ。

飛行機の客は殆んどがイン
ド人、機内に流れるBGMは数曲
のインド民謡でそれだけの際限
の無い繰返しにはいささかうん
ざりさせられた。

ボンベイは、アラビア海に面
したインド西海岸の港町で、何
となくデリーより陽気な感じを
与える。

荷物や楽器と共にキウウキ
ウ、バスに詰め込まれ、その間ボ
ーター達がチップの額で喧嘩し
たり、彼等は仲間分けするこ
となしなない。一行の誰彼も
百円ライターをせびつたり、ち
つと走り出さず、巡査
がバスの前に立ち塞がって「此
処は駐車禁止である」と因縁を
つける。無論ドライバーが目撃し
た。関係者の話では「この
コネられる厄介な金を与えた
方が万事うまく行くぞうで」「お
まわりもなかなかなが悪い
か。そこへ行くのが日本の
警官は優秀だと思われないわけ
に行かない。融通のきかない嫌
々はあるにせよ」

市内に入ると、マリンドライ
ブという道と砂浜が延々と続き
ビル街が急にバラックの貧しい
家並みにとって変わった。さ
う、人だかりがしてゐるのは大
映画館で、映画は市民の一番の
娯楽のよつた。

ちなみにボルノは後進国の
多分にもれず禁止である。

さて一行は宿舎のプレジデ
ントホテルに荷を解き、午後三時
から早速、ジャズヤトラの会場
プレジデントスタジアムで、ミキ
シングのチェックが行われた。

く、星も月も日本で見ると
は違ふ輝きを放つていた。

街中に音無く、食事に酒無く
せめて湯豆腐で一杯やる夢も
みよかかとベッドにもぐつたが
薬(サウ)を飲損つてあから
なかなか寝つかず、ちつと少
しうとうとしたのも束の間、モ
ーニングコールのベルが鳴って
ボンベイに向か出発。眠い。
一月三十一日午前十一時にボ
ンベイ空港に降り立つ。

飛行機の客は殆んどがイン
ド人、機内に流れるBGMは数曲
のインド民謡でそれだけの際限
の無い繰返しにはいささかうん
ざりさせられた。

ボンベイは、アラビア海に面
したインド西海岸の港町で、何
となくデリーより陽気な感じを
与える。

荷物や楽器と共にキウウキ
ウ、バスに詰め込まれ、その間ボ
ーター達がチップの額で喧嘩し
たり、彼等は仲間分けするこ
となしなない。一行の誰彼も
百円ライターをせびつたり、ち
つと走り出さず、巡査
がバスの前に立ち塞がって「此
処は駐車禁止である」と因縁を
つける。無論ドライバーが目撃し
た。関係者の話では「この
コネられる厄介な金を与えた
方が万事うまく行くぞうで」「お
まわりもなかなかなが悪い
か。そこへ行くのが日本の
警官は優秀だと思われないわけ
に行かない。融通のきかない嫌
々はあるにせよ」

市内に入ると、マリンドライ
ブという道と砂浜が延々と続き
ビル街が急にバラックの貧しい
家並みにとって変わった。さ
う、人だかりがしてゐるのは大
映画館で、映画は市民の一番の
娯楽のよつた。

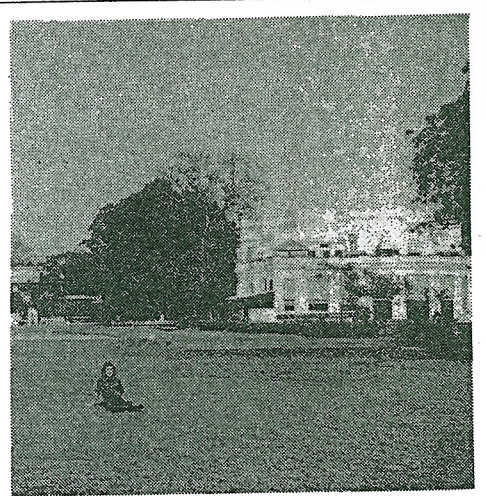
ちなみにボルノは後進国の
多分にもれず禁止である。

さて一行は宿舎のプレジデ
ントホテルに荷を解き、午後三時
から早速、ジャズヤトラの会場
プレジデントスタジアムで、ミキ
シングのチェックが行われた。

ジャズヤトラ終えて徹夜

インド演奏旅行記 下

山木幸三郎 (ニューハート)



ロイヤルゴルフクラブで (カルカッタ)

空港では、航空費をも一度払
のはくりケット競技場で、中央
に特設ステージ、周囲に椅子を
ならべて観客席が設けられ、ア
メリカ人のミキサーが海水パン
ツで立ち働き、腕は確かな
よつた。

やがて真赤な巨大な太陽が海
に沈んで、六時頃には夕陽せま
り、軒をならべた模擬店にも灯
が入って、開演の準備が整った。
L. Shankar をはじめ、
Herbie Mann (U.S.A.)
S. Grappelli (France)
B. Thompson (UK)
R. Reynolds (Holland) G.
Gallini (Italy) B. Pe-
trovic (Yugoslavia)
J. Muntac (Poland) 等々
が参加したこのジャズヤトラ
は、一月二十八日から四日間
わたつて行われ、この日が最終
日である。インド連邦地
元(インド)とニューハート等
が共演、アンコールのうちに幕
が下りたのは深夜一時であつた。
ソビエトのベース奏者が、米
國製の素晴らしいアタチマイ
クをつけていて、その楽器を足
非使つてくれと私たちに差し出す
など心細いコンサートであつ
た。

終演後も、大勢の熱心なファ
ンが楽屋を訪れ、ジャズのこと
と、日本の文化や、工業製品の
ことなど、の質問攻めで、宿舎
に引揚されたのは午前二時、カル
カタ行きの飛行機が六時の
で、そのまま身仕度して、空港
に向かわねばならなかつた。

哲人めいた風貌の人種は何処に
いるのであつた。

カラスがやまやま、はだし、
ソリー、靴が行交り、近代的ビ
ルとコロコロした市場が隣り合
う街を、車、路面電車、牛が洪
水のように流れて行く。

それらは一見不調和で、
不思議と自然に融合している。
私達のバスがすいすい埃りの中
を走るので見ると地下鉄工事の
現場で、道をスコップで掘り、
リヤカーでドロを運んでいるの
であつた。

小一時間着いたのは、
ロイヤルゴルフクラブで、一歩
中に入れば、塵一つなく、花咲
ムセクションになつたのであつ
た。彼らはホテルなどで仕事し
簡単なダンスやヨーロッパの
ポレナを演奏している。

そしてエリントンや、コルト
レン、チックコリアを教え
てくれ、コードを書きつくと
夜の更けるのも忘れ、私達は
持参の即席ラーメン、みそ汁、
梅干しなどを飲んだ。

翌日はバスで観光案内して
くれるところだつたのだが、
待てど暮らせどその気配もな
らなかつた。電話すると話した
ので、勝手に街に出る、すい
人通ひである。

可成り乗せられて行く裸の子
供を眠っているのかとみれば、
死んでいるのであつた。

若い男が、「貴方の仲間が
る」と出まかせを言つて、うす
汚ない宝器店に連れ込もうとす
るのをあきらめて歩き出す、
追つて来て「インド女を欲し
ないか」「余りわすらわしいの
でタクシーでクラブに帰る、ピ
ールを飲んでいると、賢そう
なボーイが「インドを如何思
ますか」と聞く。

返答に「さうさう」「これ
からは日本から多くを学ばねば
いけません」と言つたのであつた。完

空港では、航空費をも一度払
のはくりケット競技場で、中央
に特設ステージ、周囲に椅子を
ならべて観客席が設けられ、ア
メリカ人のミキサーが海水パン
ツで立ち働き、腕は確かな
よつた。

やがて真赤な巨大な太陽が海
に沈んで、六時頃には夕陽せま
り、軒をならべた模擬店にも灯
が入って、開演の準備が整った。
L. Shankar をはじめ、
Herbie Mann (U.S.A.)
S. Grappelli (France)
B. Thompson (UK)
R. Reynolds (Holland) G.
Gallini (Italy) B. Pe-
trovic (Yugoslavia)
J. Muntac (Poland) 等々
が参加したこのジャズヤトラ
は、一月二十八日から四日間
わたつて行われ、この日が最終
日である。インド連邦地
元(インド)とニューハート等
が共演、アンコールのうちに幕
が下りたのは深夜一時であつた。
ソビエトのベース奏者が、米
國製の素晴らしいアタチマイ
クをつけていて、その楽器を足
非使つてくれと私たちに差し出す
など心細いコンサートであつ
た。

終演後も、大勢の熱心なファ
ンが楽屋を訪れ、ジャズのこと
と、日本の文化や、工業製品の
ことなど、の質問攻めで、宿舎
に引揚されたのは午前二時、カル
カタ行きの飛行機が六時の
で、そのまま身仕度して、空港
に向かわねばならなかつた。

哲人めいた風貌の人種は何処に
いるのであつた。

カラスがやまやま、はだし、
ソリー、靴が行交り、近代的ビ
ルとコロコロした市場が隣り合
う街を、車、路面電車、牛が洪
水のように流れて行く。

それらは一見不調和で、
不思議と自然に融合している。
私達のバスがすいすい埃りの中
を走るので見ると地下鉄工事の
現場で、道をスコップで掘り、
リヤカーでドロを運んでいるの
であつた。

小一時間着いたのは、
ロイヤルゴルフクラブで、一歩
中に入れば、塵一つなく、花咲
ムセクションになつたのであつ
た。彼らはホテルなどで仕事し
簡単なダンスやヨーロッパの
ポレナを演奏している。

そしてエリントンや、コルト
レン、チックコリアを教え
てくれ、コードを書きつくと
夜の更けるのも忘れ、私達は
持参の即席ラーメン、みそ汁、
梅干しなどを飲んだ。

翌日はバスで観光案内して
くれるところだつたのだが、
待てど暮らせどその気配もな
らなかつた。電話すると話した
ので、勝手に街に出る、すい
人通ひである。

可成り乗せられて行く裸の子
供を眠っているのかとみれば、
死んでいるのであつた。

若い男が、「貴方の仲間が
る」と出まかせを言つて、うす
汚ない宝器店に連れ込もうとす
るのをあきらめて歩き出す、
追つて来て「インド女を欲し
ないか」「余りわすらわしいの
でタクシーでクラブに帰る、ピ
ールを飲んでいると、賢そう
なボーイが「インドを如何思
ますか」と聞く。

返答に「さうさう」「これ
からは日本から多くを学ばねば
いけません」と言つたのであつた。完

空港では、航空費をも一度払
のはくりケット競技場で、中央
に特設ステージ、周囲に椅子を
ならべて観客席が設けられ、ア
メリカ人のミキサーが海水パン
ツで立ち働き、腕は確かな
よつた。

やがて真赤な巨大な太陽が海
に沈んで、六時頃には夕陽せま
り、軒をならべた模擬店にも灯
が入って、開演の準備が整った。
L. Shankar をはじめ、
Herbie Mann (U.S.A.)
S. Grappelli (France)
B. Thompson (UK)
R. Reynolds (Holland) G.
Gallini (Italy) B. Pe-
trovic (Yugoslavia)
J. Muntac (Poland) 等々
が参加したこのジャズヤトラ
は、一月二十八日から四日間
わたつて行われ、この日が最終
日である。インド連邦地
元(インド)とニューハート等
が共演、アンコールのうちに幕
が下りたのは深夜一時であつた。
ソビエトのベース奏者が、米
國製の素晴らしいアタチマイ
クをつけていて、その楽器を足
非使つてくれと私たちに差し出す
など心細いコンサートであつ
た。

終演後も、大勢の熱心なファ
ンが楽屋を訪れ、ジャズのこと
と、日本の文化や、工業製品の
ことなど、の質問攻めで、宿舎
に引揚されたのは午前二時、カル
カタ行きの飛行機が六時の
で、そのまま身仕度して、空港
に向かわねばならなかつた。

哲人めいた風貌の人種は何処に
いるのであつた。

カラスがやまやま、はだし、
ソリー、靴が行交り、近代的ビ
ルとコロコロした市場が隣り合
う街を、車、路面電車、牛が洪
水のように流れて行く。

それらは一見不調和で、
不思議と自然に融合している。
私達のバスがすいすい埃りの中
を走るので見ると地下鉄工事の
現場で、道をスコップで掘り、
リヤカーでドロを運んでいるの
であつた。

小一時間着いたのは、
ロイヤルゴルフクラブで、一歩
中に入れば、塵一つなく、花咲
ムセクションになつたのであつ
た。彼らはホテルなどで仕事し
簡単なダンスやヨーロッパの
ポレナを演奏している。

そしてエリントンや、コルト
レン、チックコリアを教え
てくれ、コードを書きつくと
夜の更けるのも忘れ、私達は
持参の即席ラーメン、みそ汁、
梅干しなどを飲んだ。

翌日はバスで観光案内して
くれるところだつたのだが、
待てど暮らせどその気配もな
らなかつた。電話すると話した
ので、勝手に街に出る、すい
人通ひである。

可成り乗せられて行く裸の子
供を眠っているのかとみれば、
死んでいるのであつた。

若い男が、「貴方の仲間が
る」と出まかせを言つて、うす
汚ない宝器店に連れ込もうとす
るのをあきらめて歩き出す、
追つて来て「インド女を欲し
ないか」「余りわすらわしいの
でタクシーでクラブに帰る、ピ
ールを飲んでいると、賢そう
なボーイが「インドを如何思
ますか」と聞く。

返答に「さうさう」「これ
からは日本から多くを学ばねば
いけません」と言つたのであつた。完